

が、東京湾周辺都市群の形成というより高い次元でみなおされ、横浜自身その典型としての街づくりに力をそそげば、そこには新しい文化が芽ばえてくるのではなからうか。

もうひとつは、「ミナト」とは自然と人工の調和である、とする見方。港は、もちろん自然的与件としての海がなければならぬが、かといって海があるだけでは港ではなく、その自然的与件を、いかに改造し変革したかという人工的施設があってこそ港である、という余りにも当然なことの再認識である。かつて山下公園に鉄道を通す時、色々な反対意見がだされたが、やはり一番根強い反対は、昔ながらの公園の雰囲気をごねはしないか、ということであった。しかし、考えてみると、あの山下公園でさえ、つい昭和の初期に開設されたばかりなのである。横浜の一番最初の自然海岸線は、現在のお三の宮附近にまで入りこんでおり、伊勢佐木町や関内はおろか、今の横浜駅の周辺はすべて、海の底であったのが、その後の新田干拓、開港、埋立と、順次現在の姿に変ってきたのである。港の物理的、社会的機能は、おそらく今後も大きくかわってくることだろう。しかし、海という非常に大きな自然的な条件を前に、それを改造し利用するために築きあげられていく施設が、何時も美しい調和をたもっていくかぎり、「ミナト」は、横浜文化の、ひとつのシンボルであるだろう。そのためには、現在のような埋立は埋立、港湾は港湾、住宅は住宅といった建設のされ方では決してうまくゆくはずもなく、先ずトータルなビジョンとしての都市計画にもとづいた、長期の統一的な街づくりを軌道にのせることこそ、新しい文化の基盤となるであろう。

## 横浜文化論

### ヨコハマとはなんだ



斉藤 栄

<横浜市建築局>

#### 1

こんな記憶がある。

今から十数年前、私は大学生であった。鎌倉から本郷まで、毎日のようにかよっていたのである。その数年間、私はついぞ、横浜に下車しなかった。“ミナト・ヨコハマ”の名を寡聞にして知らなかったわけでもなく、道草する隙のないほど多忙だったことはない。要するに、私を魅了する何物かが欠けていたのである。そして、今日、もし、私が横浜に勤めず住まざしたならば、はたして横浜に下車するだろうかと問いかけたとき、憮然たらざるをえない。

一体、大都市横浜とはなんであり、そこにはいかなる文化が存在するのだろうか？

#### 2

横浜とは、本来、現在の「関内」一帯のみを指したものである。そして、かつての横浜文化は、国の施策のもとに、開港場とそこに作られた外国人人居留地という、エキゾチックな背景のもとに開花していた。

それが関東大震災と戦災のために、完膚なきまでに変質した。そこに残されたものは、米軍の接収

と、広大な市域と、そして、年々8万に及ぶ人口の増大とである。

いったい、私達は、こういう横浜を、どのような観点から評価し、その文化的位置をいかに価値づけるべきであろうか。

### 3

文化とは独創的なものでなければならない。それは本来、文化の精神性から生まれる当然の帰結である。それゆえに、主体性のない文化は真の文化たりえない。

いま、横浜という行政地域を見ると、それはあまりに散漫としていて、文化圏として構成するには戸惑いを感じる。そして、この野放図な市域に、東京文化が、それも稀薄な状態で散らかっている現状に過ぎない。

横浜で一番、活況を呈している地区は、横浜駅西口だけであるが、その資本の90パーセント以上が東京の流入であるように、文化の表現の貧弱さはお話にならない。

つまり、横浜は文字通り、東京のベッド・タウンになっている。いや、外来語を使わずに、サラリーマンの寝床街だと表現した方が一層適確だろう。もっとも、さりとは、立派な寝床が用意されているとは見えないが。

### 4

この現象の最大の原因は、横浜の人間達が横浜のために何か企てる前に、現代日本特有の「長いものに巻かれる」精神が瀰漫してしまったのだ。

いまの物質文明は、必然的に文化の均一性を伴っている。どこにでもかしこにでもあるもの、そ

れに市民が飛びつく。飛びつくように仕向けて、マスプロダクション、マスコミュニケーションの実をあげる。それが現代日本の高級文化である。つまり、金儲文化なのだ。それに加えて、歴史的に日本人は中央集権に慣らされている。猫も杓子も東京でなくてはならない。精神面の指導者も政治家も、中央政府の方を見ている。見なければ生きられない仕掛がある。

幸か不幸か、いわゆる大都市の中で、横浜は東京に一番近い。その上、ごく最近まで、半身不随の病人だった。結果は想像にあまりあるではないか。

### 5

したがって、「横浜には、横浜が誇るに足る文化があるか？」と問われれば、どうしても否定的にならざるをえない。

その意味する所は、前述の指摘でほぼ理解できることと思う。

かつて、横浜を訪れた私の友人は、町に出て「横浜はたいらな町だ」と言った。彼の目に映じた関内一帯は、いわゆる関内牧場であった。しかし、彼の慨嘆は、単に町の風景だけではなかったろう。町を行く人々から、昂然たる精神の発揚を感じることがなかったせいも、多分にあったと思う。

横浜は巨大な村落である——それは多少とも、戦後の横浜に足を入れた人々の感慨ではなかったか。

しかも、困ったことに、年々増加する横浜市民は、その文化的源泉を、地元ではなく、隣りの東京に求めて汲々たるものがある。

それでは、これからの横浜を文化都市として発展させる方途、如何と云えば大略三つある。

第1は工業面のそれで、この線は根岸湾埋立を出発点として、すでに為政者の着眼するところだ。

第2は商業面。これには、どうしても、東海道線沿線の発展がなくてはならぬ。まず、湘南電車を、鶴見、保土ヶ谷、戸塚の駅に停車させる。この3駅を中心に、横浜駅西口なみの商業コアとする。

そして、馬車道、伊勢佐木町方面の商店街は、次の第3方途のヒンターランドに切りかえる。

つまり、横浜本来の特徴たる港を最大限に生かし、横浜を自由港市にしてしまうのだ。関税区域外に置く区域は、出田町ふ頭から本牧ふ頭までとして、臨港地区をこれにあてるのが妥当だろう。そこでは、居住の自由、改装、仕分、製造、加工の自由も許す。

こうして、横浜を文字通り、国際港都たらしめれば、東京と違った、東京には存在しえない特異な文化を持つことができるだろう。この形態は、貿易、経済、文化、風俗、思潮のあらゆる面において、横浜本来の存在の意義<レゾン・デートル>と、歴史的にも一致するものではないか。かつてのように、中央から押しつけられたのではなく、今度は、横浜市民が自発的にそれを求めるのだ。

横浜にとって致命的な事実、この歴史的地理的宿命の都市を、いたずらに、サラリーマンのベッドタウンと化してしまう趨勢である。そうなることはヨコハマの死である。私が縷縷指摘してきたのは、まさにこの現象にほかならない。横浜に横

浜の文化がなくなったのは、それなりの理由がある。

むろん、往年の外国租界や、現在の接收地のような状態は真っ平だ。米軍よ、早く撤兵せよ、と叫びたい。

が、しかし、外国人のいない「ハマ」なぞ魅力のないこと、おびたしい。

日本に住む外人は、そのほとんどが横浜に住んでいる——こういった状態を作り出したい。そのための施設をどしどしつくる。横浜市民は、民間外交使節となるのだ。そうして、異国文化と日本文化の結節点で、絢爛たる横浜文化を建設しようではないか。

さらにつけ加えるならば、大都市横浜のもつ特殊なヒンターランドたる、緑の農村地帯の活用を忘れてはならない。

東京、大阪の大都市には、緑の地帯がほとんどなくなりかけている。それに比べれば、横浜は緑の大都市だ。これをいたずらに平凡な宅地化することなく、「子供の国」のような施設を多く作って、ユトリのある都市を指向すべきである。それでこそ、スケールの大きな横浜文化を生む母体となるだろう。

「東京のようにバラック文明ではなく、渋いエキゾティシズムがとけこんだ」と大仏次郎氏の表現した横浜を、さらに飛躍した形で発展させるのは、現代に生きる私達の使命に違いない。